
裏世界の住人

桜庭・FF・二次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏世界の住人

【Nコード】

N4559Y

【作者名】

桜庭・FF・二次

【あらすじ】

ポケモントレーナー育成学校を卒業したものの、就職難の壁に押されていた浦野実がやっとの思いで見つけた就職先は、みんなが忌み嫌う悪の組織、ロケット団だった。

*本小説はポケモン徹底攻略様のポケモンノベルにも掲載されています。

第一話 part 1

「なんなんだよ、ここ……」

ジョウト地方一の都会、コガネシティ。その街のとあるビルとビルの間の路地に立ち尽くしている一人の男がポツリと何かを呟いた。その表情からはまるで何かに裏切られたような、絶望が滲み出ている。後ろから軽く押せば膝から崩れ落ちてしまいそうだ。

そんな彼はなんとも奇抜な服装に身を包んでいた。胸に赤く大文字のRが刺繍された黒を基調とされた服、頭のサイズに合わない大きめの黒帽子。一般市民と呼ぶにはいかにも不適応な格好だ。

そう、彼はまさに一般の人間ではなかったのだ。

*

*

時は遡ること数日前。お隣のカントー地方とこの地方を結ぶ関所が近くにあり、そのことからカントー住民からは始まりの村とも呼ばれるワカバタウンに、その男は暮らしていた。

「実、あなた旅人やめてからダラダラしてばかりよ。偶には仕事を探さない」と

「五月蠅い。こつちだつて仕事ぐらい探してる。でも、こんな田舎には良い仕事なんて無いし、だからといって遠くの街へ出かけようとしたら、親父がそんなところ行くぐらいなら俺の仕事を継げって言うし、どうしようもないじゃないか」

まだ陽も昇って間もない筈だが、そんな時間帯から親子で口論している様子が見受けられる。その中の母親に怒られて少々不機嫌になっている男の名前は浦野実という。彼は名門のポケモントレーナ

「育成学校を出た人間で、それから旅人として生活をしていくつもりだったのだが、思うように金を稼ぐことも勝負に勝つことも出来ず、終には自宅に戻って来たのだという。」

そのため、実は毎日のように親から仕事についてとやかく言われる破目となっている。実自身も、毎回毎回怒られるのは精神的にも堪えるものがあるので、頑張って仕事を探しているようなのだが、その努力が実るような結果はまだ出ていない。

「だったら、諦めて農家を継ぐしかないわね」

「嫌だ。まだ一八なのに、人生をそんなことで無駄にしたくないね」「もう一八でしょうが。いつまでも親に甘えて生活出来る年ではないのよ？ それをわかっているの？」

静かながらも妙に迫力のある母の言葉に、実は下唇を噛んで悔しそうに睨み顔を向ける。そして彼は何も言わぬまま、家を飛び出し何処かへ行ってしまった。母は軽く溜息を吐きながら、自分の息子の将来に不安を覚えるだけだった。

実は遊具が滑り台一つだけという寂しげな公園にあるベンチの上で横たわっていた。その表情からはまだ親に対する憤慨が抜けきっていない様子で、左足は貧乏揺すりをしていた。

「何で俺、こんな駄目人間になっちまったんだろう……」

無意識なのか、実の口から零れるように言葉が出てきた。

確かに彼は誰もが羨む学校を出ている。また彼自身も自らの持つトレーナーとしての資質に自負心を持っていた。しかし、彼を待っていた現実の仕事すら見つからないニート生活。嘆きの言葉一つ、出ない筈もない。

「おい」

「うお！？」

突然、実の顔に何か硬い物体がぶつかった。驚きのあまり、彼はベンチから転げ落ちそうになってしまったが、そこは何とか堪えきったようだ。それよりも、彼はいきなり何かをぶつけてきた犯人に警戒と怒りの目を向けた。

しかし、その目つきも相手の顔を捉えると直後に、次第に緩まっていた。

「ミッル？ お前、何でここにいるんだ？」

「久しぶりだな、実。お前こそ、こんな蜘蛛公園で何寝てんだよ。奴らの糸に捲かれるぞ」

実が目の前にいる男の名前を知っているだけあり、二人は知り合いだと思えられる。彼からミッルと呼ばれたその青年は、紫色の髪の毛に細い目という不気味な風貌をしている。そのミッルは実に投げつけたと思われる物体を、軽くしゃがんでベンチの下から拾った。

「お前、モンスターボールを俺の顔面に投げやがったのか。それに、蜘蛛公園って……無駄に懐かしい呼び名だな、それ」

「まあな。でも、そこら見回してもイトマルの姿が見つかりやしない。ここも変わったもんだ」

「ここも一応、村の中だからな。野生のポケモンの巣を作らせるのは危ないって、二年前くらいに村の自治が駆除を行っちゃった」

実が平坦そうな顔で話をすると、ミッルが悲しげな表情を浮かべた。恐らく、彼にとってこの公園はそれなりに愛着のある場所だった。

たのдарう。

「前の村長はポケモンとの共存を願う人だったが、別の奴に替わってからはここもすっかりと変わっちゃった」

「そりゃあ残念な話だ。俺が村を出ている間にそんなことがあったとはな」

「それにしてもお前、中卒で仕事が見つかってそのまま村出てったけどさ、何の仕事に就いてるんだ？ お前、最後まで教えてくれなかったよな」

「今日はそのことで話に来たんだ」

ミツルは今までのノスタルジアに駆られていた表情から一変して、無表情ともれそうな平坦な顔で話を始めた。

「お前が数ヶ月で旅人をやめたって、知り合いから連絡を貰ったかな。お前には色々之恩があるし、俺の所でお前を雇ってやろうかなと思ったんだ。もし、まだ仕事が見つかってないなら、考えてくれないか？ 結果を出せば給料はそれなりに出るし、少し覚悟を決めれば楽しい毎日を過ごせるぞ」

「……ま、マジか！？」

実は願ってもいない就職話に、勢いよく上体を起こした。その目からはさっきまでの怒りに濁ったものとは打って変わって、輝きすら発されている。

「ああ。俺もその仕事じゃあかなり上の位置にいるから、お前一人を入れるコネぐらい何とかなる」

ミツルはその陰鬱そうな見た目とは裏腹に、白い歯を剥き出しにしてサムズアップを見せた。

「まじで助かるぜ！ で、その仕事は何なんだ？」

「ある組織なんだけどな。ポケモンを捕まえたり、トレーナーとバトルしたりする仕事だ」

そこまで話すと、実の表情から歡喜の気持ちが少しずつ抜けていった。理由は恐らく、彼が抱えているコンプレックスによるものだろう。

「その仕事、大丈夫なのか？ 俺、トレーナーで結果を出せなかったから、こうしてニートやってんだぜ」

「大丈夫だ。うちの組織じゃトレーナーとしての力が弱くても、他の雑用や適当な仕事をやってくれれば役には立つぞ。それに、お前は小さい頃から村じゃ佐野に並ぶ実力の持ち主だった筈だ。一度、挫折したとしても、そこから立ち上がっていけばきっと良い事があるだろうよ」

ミッルはまるで自分の言うことに偽りは無いとでも示すかのよう
に、真っ直ぐと実の目を見つめた。

「なら、お前の好意に甘えさせてもらうとするかな」

「お前……なんだその偉そうな口調は……」

ミッルは思わず苦笑いを浮かべてしまったものの、パンと手を叩くと実にベンチから立ち上がるよう促した。

「まあ、これで決まりだな。お前はまず、親にこのことを報告してこい。恐らく、当分は会えなくなるだろうから、別れの時間くらい必要だろ？」

「おお、サンキュー」

「俺はここで待つけど、まあゆっくりしてこいよ」

今度はミツルがベンチに座って、実に向かつて早く行けと右手をヒラヒラと動かした。それに促されて実は自分の家へと向かつて歩き出した。

だが、公園の入り口まで来たところで、実は急に振り返ってミツルに言った。

「お前、こんな所じゃ寒いんじゃないか？ ウツギの所で待ってたらどうだ、あいつも喜ぶぜ」

「ウツギっち、か……。でも、俺は遠慮するよ」
「そうか」

こころなしかミツルの表情が歪んだように見えたが、実はそれからは特に何も言うことなく再び歩き始めた。

「今の俺に会って……。一体誰が喜ぶのだろうか。そして、ごめんな実。今の俺にはどうやらお前の助けがいるようだ」

ミツルは家へ向かう実の後ろ姿を見送ると、さっきの彼のように体を横にして眠り始めたのだった。

第一話 part 2

「ミツル、いつまで寝てるんだ？」

「……！？ 何だ！」

実がモンスターボールをミツルの顔めがけて投げると、それは上手く彼の顔に当たった。ミツルは突然のことに声を荒らげ、しかもその勢いでベンチから転げ落ちてしまった。それを見て実は意地の悪い笑い声を上げる。

ミツルは服の土が付いてしまった部分を払いながら立ち上がると、ただでさえ細い目を更に細くさせて実のことを睨んだ。

「お前…… やられたことは絶対にやり返す性格は変わっていないな」

「やられっぱなしだとムカつくからな」

「それじゃあ、何で旅人を辞めたんだよ。その時はやられてもやり返そうって気持ちじゃなかったのか？」

ミツルの急な問いかけに実は一瞬だけ言葉を詰まらせたが、違うと言否定をした。そして、軽く俯きながら悔しそうに続ける。

「何度も何度も負けた相手に対して再戦を申し込んだが、結局俺が勝つことなんて全く無かった。だから、もう諦めたんだよ。俺にはトレーナーとしての才能が無いって」

「そうか。でも、この仕事はそんな甘っちょろいことを言う余裕すら無くなるかもしれないぞ。それでも、本当にやりたいと思うのか？」

「ああ、親父の農家を継ぐよりはまだマシだ。どんな仕事でもやってやるぜ」

実は悔しげだった表情を消し去って、白い歯を剥き出しにしながら意思を表示した。そんな彼の覚悟に、ミツルも何かの決心をつけたと同時に少しだけ申し訳なさそうな表情を浮かべた。しかし、実はそんなミツルの変化に気付くことはなかった。

「それじゃ、帰って来たということは親に別れを告げたようだし、そこにあるケースを見る限り荷物も整理したようだな。それじゃ行くか」

「そうだな。金は親から結構貰ったから、交通費に困ることもないだろうしな」

「当たり前だ。俺は金なんか貸さないぞ」

ミツルは微笑しながら、再び戻ってくるかも分からない故郷の景色を目に焼き付けると、まずは駅に向かって蜘蛛公園を後にした。実もそんなミツルの後ろについていった。

二人が向かったのはコガネタウンというジョウト地方でも有数の大都市だった。実自身、この街に来るのは初めてだったようで、立ち並ぶ高層ビル群に目をキラキラと輝かせていた。

確かに、田舎から来た人間にとってこの街は憧れそのものだろう。カントー地方に直通するリニアモーター。全国でもトップレベルの品揃えを誇るコガネデパート。ジョウト中に電波を発信するラジオ塔。どれもこれも、ワカバタウンでは見ることの出来ない建物や施設ばかりだ。

「すげえな、コガネシティって……デカイ建物ばかりじゃん」

「そりゃ、そうだ。どの地方にもド田舎と大都会は一つずつくらいあるだろ」

「そのド田舎はワカバタウンのことが……」

「ん、まあそうなるな」

二人は街の大通りを歩きながら、これから実が生活する寮へと向かう。しかし、まだ寮までは距離があるらしく、実は首が痛くなる程の高さのビルをあちらこちら見回していた。

それから十分くらい歩くと、二人はとうとう寮に辿り着いた。その外観は立派とは言えたものではないが、社員寮としてはまあまあ丈夫そうで雇ってもらう身としては十分過ぎる建物だった。

「今日からお前にはここで暮らしてもらうぞ」

「分かった。すぐに荷物を置かせてもらうな。部屋とかは誰に聞けばいいんだ？」

「中に管理人がいるから、その人に聞け。話はもう済ませてあるから」

実はサンキューと言って、ケースを引っ張りながら寮の中へと入っていった。

寮の中は普通の団地住宅みたいなもので、一階には管理人さんがいたので、実はその人から部屋の場合と鍵を譲り受けた。そして二階の一番階段に近い部屋の扉を開けると、中に入って重たい荷物を部屋の隅に置いた。

ミッルはそんな部屋に着いて伸び伸びとしている実の姿を見て、ますます申し訳なさそうな表情を浮かべた。それはまるで、何か重大なことを実に隠しているようだった。

第一話 part 3

二人はいつまでも部屋にいるわけにはいかないので、寮を後にすることにした。

「これからチョウジタウンに向かうけど、行ったことはある？」

「チョウジは一度だけあるな。場所は覚えてるから、飛行ポケモン使っていくよ」

「それなら交通費も浮くな、ありがたい」

ミツルがそう言うと、彼はベルトに付いていたモンスターボールを一つ手に取る。そして、それを思い切り上に投げた。ポンツと酒瓶からコルクを抜いた時のような音と共に、中からピジョットという鳥型のポケモンが現れた。

実も同じように、モンスターボールからポケモンを出す。種族はリザードンと呼ばれる火を操るポケモンだ。

二人はそれぞれのポケモンの上に跨るように乗る。そして、ミツルの行くぞ、という言葉を含図に二匹のポケモンがコガネの土地から飛び立った。

「ポケモンを使うなんて久しぶりだ」

実は少しずつ小さくなっていくコガネの街を見下ろしながら、ぼそりと呟く。彼は旅人を辞めてからは、一度もポケモンに触れていなかったようで、その管理もポケモンセンターや預かりシステムに任せていたらしい。その為、街を見下ろすという感覚とリザードンの少し暖かい背中が懐かしく思えるようだ。

ポケモンに乗っている間は、舌を噛む可能性があり、なるべく喋らないようにしているので、静かにしている人間が多い。二人も一

緒だ。会話を交わすことはせず、それぞれ辺りの景色を楽しんでいる。

地方という単位はそこまで大きいものはないので、チョウジタウンには意外とすぐ着いた。二人はそれぞれのポケモンをそれぞれのモンスターボールに戻す。

「しかし、こんな町の何処に行くんだ？」

「実は、俺たちの組織は地下に拠点を置いていてね。まあ、ここは数ある支部の一つなんだけど」

そういつてミツルはとある一軒の建物の中に入った。実もその後ろについて、その建物の中に入った。

中は至って普通の家だった。家具が結構多めに配置されているところには不自然な点も感じるが、それ以外は本当に何の変哲も無い人の住居だった。

「この何処かに入り口があるのか？」

「そうだ。俺が開くから少しジツとしてくれ」

「……なんか秘密組織みたいだな」

ここで初めて実が違和感のようなものを覚えた。急に身体が悪寒のようなものでぶるっと震えたからだろう。

しかし、ミツルは決して待つてくれるようなことはせず、数ある家具のうちの一つを横にずらした。すると、そこから地下へと繋がる階段のようなものが現れた。

「俺は今から色々と書類とか取り出すから、お前はここら辺で寛いでくれ」

「分かった」

ミッルは実の了解の言葉を聞くなり、その先が真つ暗でよく見えない階段をゆつくりと下っていった。

「まさかとは思うが……ミッル……」

少しずつ見えなくなっていくミッルの後姿を眺めながら、実の不安は少しずつ高まっていくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559y/>

裏世界の住人

2011年11月17日21時04分発行